

なりと思惟せり、近來文運の發達と、人智の開明とは、完全なる一大人格を要求す、是れ易より難に達せんとする、捷徑なればなり。

希くば識者諸賢千猫中一鼠の駄稿に、一縷の光明を與へ給へば、雷に大旱の雲霓に於ける比のみにあらず、「又如一眼之龜值浮木孔」徒に余一人の幸なるのみに非、是れやがて宗門の慶事なり。

## 日本佛教史より觀たる

### 日蓮上人

堀 龍 淳

#### (一) 序 言

大戰後に於ける世界思潮の惡化、人心歸趨の失墜は和國の岸へも漂ふて渺からぬ動搖と恐怖とを與へて居る。今の裡に根本的救濟策を怠つたならば、死地に陥らしめる程をそれ程、赤熱化の暴威を逞ふして居る。此の際此の秋靜かに日本佛教史を繕いて法華傳來の聖者、上宮、傳教、吾祖の三大

偉人の面影を想起したならば蓋し感慨無量なるものがある。而も今年は太子の千三百年大師の千百年忌辰と吾祖降誕七百年の嘉會正當である。何と不思議な廻り合せではないか。更に其の三聖共に「眞俗一貫」「王佛冥合」を以て經國の理想要諦とされたと云ふ共通點を見出す時甚深の意味が存すると思ふ。

今私は此の三聖あつて始めて日本佛教としての光輝と特色が存するものであり、更に吾祖の出現によつて其完成結論に到達し臥龍点睛以て生命を賦與したものであると云ふことを史的過程を無視しない限りに於て、其大要を論じて見たいと思ふ。

#### (二) 聖德太子の佛教觀

太子誕生の年代異説や南岳化身説等に就ての校量研究は今の、所論でないから後日に譲るとして直ちに太子の佛教觀に入ることにする。太子の佛教觀は一言以て之を謂はゞ十七憲法及三經疏に於て盡きて居る。

十七憲法は大体上儒教道德の色彩が濃厚であるが

第二條の一君萬臣の思想は確かに吾邦固有の國體論である。然らば十七憲法は吾國體精神を以て儒教を統一せられたるものなりや、將又儒教を以て國體精神を統一歸納せられたるものなりやと云ふに共に然らず、第十條の終りに「共是凡夫耳」とあるを以て見れば實に佛教を以て其立脚とせられたことが明白である。翻て篤敬三寶の精神は四生の終歸、萬國の極終なるものであつて、此の理想の下に、有情非情、天地萬國を統一し開導せんとするもので、其の理想の内容を更に具説したものが實に三經疏である。

太子御著述の三經疏は光宅の三教五時判説を襲用されて居ることは事實であるが、これを以て直ちに涅槃宗學者なりと速斷してはならぬ。何となれば太子の佛敎は學派未分の時代であつて、而も猶五時判説の承用は一往形式上に止まり其敎義實質の内容より見れば、法華中心論者であつた。即ち法ヶ經疏に於て今經の諸經中王最爲第一なることを述べ、更に第一なる所以を審かにするに會前開

後の二敎を以てし給ふ會。前とは三乘即一、萬善同機の義であつて爾前四十余年の經々を法華迹迹に於て攝歸融會することである。開後とは、法華本門壽量所説の常住不滅は涅槃經の如來常住を説いた文であつて、其由漸開路なるものである。故に法華經は前半迹門に於て爾前を會し、後半本門に於て、涅槃の開路たれば最後第一となすと。更に云く、壽量の常住は五時を經るの人は知らず、然らざるは知る、と是れ蓋し涅槃通途の學者と頗る其の徹を異にする所である。

已上述べた所によつて太子佛敎觀の中心は略明になつた積りであるが、進んで太子が佛敎を政治に採用された深旨はと、云へば勿論國益經營の術策としてであつて「政敎一致」「眞俗一貫」は實に太子の理想であつた。此のことは先にも論じた篤敬三寶の精神や「諸惡莫作」の四句偈を以て子孫を導かれたと云ふを以て見るも明である。

太子創建の「眞俗一貫」の理想と法華佛敎を本邦に始めて輸入し傳持されたと云ふ勳功は吾佛敎史上

不朽の輝きであると共に吾等國民の一日も忘るべからざる恩恵であると思ふ。

### (三) 傳教大師と其末流

聖徳太子政教一致の理想は奈良朝、聖武、孝謙二帝の時に至つて一分具現化したと云へば云へないこともない。即ち國家鎮護としての東大寺、國分寺の建立は、天武帝の頃から源を發しては居るが勅命によつて實際現はれたのは聖武帝の時であつた。鑒真和尚によつて傳へられた律宗殊に白四羯磨の整式と四處戒担の建立は南都佛教中に於ける一大莊觀であると同時に當時教界風靡の狀を察するに難くない。乍然、法相第四傳の師玄昉が朝廷内道場に入出し、義淵の徒、道鏡また、孝謙帝の寵を受けて太政大臣禪師となり、臣下としてあるまじき皇位の尊嚴を冒さんとするに至つては佛敎墮落の極点であり太子政教融合の聖旨を悪用したものと云はねばならぬ。殊に奈良朝に於ける所謂南都六宗は小乘若くは權大乘宗であつて太子佛敎の中心たる實大乘法華は其陰影だに見る事が出来

なかつた。此の意味から云へば、太子理想の一分具現と云つたのも取消さなければならぬ。如是墮落せる佛敎の救濟と南都小乘の戒担を打破折伏して、叡岳高く大乘圓戒の旗幟を樹立し、遠く太子「眞俗一貫」の理想に教理的基礎を賦與したのが平安佛敎の代表者、傳大教師其人であつた。大師もと奈良大安寺にあつて鑒真將來の天台三大部を閲して大いに感ずる所があつた。越えて、延暦廿三年入唐還學生の勅命を奉じて彼土に渡航し、圓密禪戒の四宗を相承し在唐二年の後大同元年八月歸朝して開宗宣言をした。大師によつて開敷された三宗統一の日本天台は其玄旨を道邃相承の本覺法門に來由しては居るが支那天台の理の一念三千觀に比すれば、稍之を具現化し實際化した点に一段の進歩發展を見なければなるまい。叡山樹立の梵網戒は大師已前全然傳へられなかつたのではないが未だ小乘圈内にあつて、所謂、四儀に共して有名無實のものであつた。其の小乘を打破して純一無雜の法華圓頓の大戒を建て、國家鎮護の實あら

しめ、且は奈良僧綱の羈絆を脱して叡山の獨立を期せんが爲めには、弟子光定に向つて「我れ戒法の爲めには身命を惜まず」とまで云はれた位である。此の破邪顯正の叫びは實に奈良佛教より平安佛教への一大轉開であつたのである。

抑大師は單令用實以偏助圓の御化導であつて三宗統一も法華開顯の意に依り助道方便として、三宗を採用されたまでである。然るに其統一融合の深旨を具説されなかつた一事が禍を産むで折角の情山も後世權實雜亂の濁流をなす源となつたのである。乍然其半面、大師と同時に入唐し歸朝の後は嵯峨帝の寵遇を受けて勅許金剛峰寺の大刹に、進むで敗を取らむよりは退いて百年の大計を企てる底の攝受的陣容を整へた弘法の大軍が潜むで居ることを看過してはならぬ。傳教死後の隙を衝いて一時に平安城下に攻め入つた弘法の勢力には南都六宗の弱卒は勿論傳教門下の精銳も遂に弓矢を收めて旗下に馳せ參じた。慈覺。智證。安然(禪にも化したが)の密教化は即ちそれであつて、平安

朝の佛教を以て密教時代と呼ぶ又宜哉である。智證大師より約七十餘年にしてさまで衰頹した叡山の義學を再興せんとした慈慧僧正の門下に慧心檀那の二傑があつた、就中慧心は本覺法門を究竟高調した偉勳者として激賞する者があるが往生要集の述作によつて後の淨土開教無間謗法の由漸をなした大罪は如何にして償はむとするのであるか。以上之を要するに理觀冥想、苦修練行の支那天台より出でて、稍事的に發展を企圖して立つた三宗統一の日本天台の傳教の入寂間もなく、内は大師以偏助圓の玄旨に迷ひ外は密教の影響を受けて顯密濕同、權實雜亂の謗法と化し終つた。

#### (四) 平安末期より吾祖出世迄の概觀

弘法の布教政策が時代思潮に適合したと云ふものか、兎角平安朝の人心を收攬し得て國家の安寧玉體の平安は偏に眞言事密の獨占する所となり、天皇皇子、攝關の落飾出家、目を繼いで増加し、造寺供物また前代未聞の盛況を呈した。斯くして貴族的佛教となつた平安の密教は莊園の激増、勢

力の隆大につれて僧兵の跋扈漸く暴威を逞ふして新古義二派の争鬪、東台兩密の喧擾は年中行事の觀があつた。斯る社會狀態の下にあつた一般民衆の不滿と信念の渴望とは想像に難くない。其の時機を促へて突貫したのが空也の踊跳念佛と良忍の融通念佛であつた。就中融通念佛は良忍の所謂彌陀直授の法門に發源して他力往生を主張し乍ら而も猶天台の三諦圓融華嚴の事々无疑法界の教義を巧に利用した烏鼠中立の變態佛教である。蓋し平安より鎌倉に移る過渡佛教としてはこれまた萬止むを得なかつた事と思ふ。

木曾義仲、源頼朝の擡頭によつて長袖者流大宮人の長夜の夢は破られ、さしも榮華を極めた平家一門も西海の藻屑と消えて鎌倉建府の一幕は開かれた。此の間に於ける急轉直下の社會變動は蓋し吾人の想像だに及ばない位であつた。陣頭往來の腕試しから自己の實力を知り無自覺不徹底の傳統生活から脱して、人間本然の自覺に活きむとする鎌倉武士中心の彼等には奈良平安の舊宗に依つて到

底満足し得るものではなかつた。直指人心見性成佛、己心即佛を誇張する新來の臨濟、曹洞が此の機運に迎へられて、建長、建仁等の創建間もなき禪刹の繁榮は蓋し當然であつた。他力往生、彌陀悲願を標榜して立つた法然親鸞の新興佛教は縱令夫が未顯眞實の教であるにせよ、此の間の地方民衆に投じてよくも歸依渴仰を受けたのは機宜頗る當を得たものと云はねばならぬ。其他平安末期に於ける一般僧風の墮落と運命を俱にした戒學戒行が新政府の創開、社會革命に刺戟せられて其の復活を叫んで産れた南北兩京律の活動も亦、目覺しものであつたらう。

#### (五) 日蓮聖人

然るに思へ時は是れ末法澆季機は是れ本未有善、國は是れ大乘有緣である。若夫れ釋尊の金言空からず、教法流布の序次規矩整然たらば法ヶ本門弘通の聖者出現は疑を容れべきではない。果せる哉建長五年四月廿八日、満々たる太平洋の狂濤岩根を噛む清澄山上の一角、無明の闇を破つてさし昇

る旭日に向ひ雄々しくも開宗宣言の火蓋を切つた  
未法萬年救世の主は現はれた。在滅經宗を批判分  
類し、取捨簡擇する實教五綱の利劍と佛滅已後三  
國未曾有の大燈宗旨の三秘は業に已に整呈して新  
教興立の聖者日蓮の胸中には深く秘藏せられてあ  
つた。四個格言の提唱は建設の前の破壊であり、  
立實の爲めの廢權であつた。天地に轟く折伏の鐵  
錘は既成宗教を粉碎して一物として存在の意義な  
からしめ日出後の星光を思はしめた。開宗當時に  
於ける宗祖の勇姿と胸中を思ひ浮べる時常時も肉  
踊り、血涌くの概がある。

前にも述べた如く、太子は法華中心の雙用權實、  
通佛教家であつて、今茲に余は、東邦法華傳持者  
としての讃詞を呈するに躊躇するものではない。  
然し吾國に於ける法華弘通宣傳の正導師としては  
傳教大師と吾祖を推さねばなるまい。但し大師は  
單令用實の以偏助圓、吾祖は但令用實の廢權立實  
である根本的立場の相異を忘れてはならぬ。三聖  
俱に法華中心ではあるが、其の所持教法の内容實

質に於て從淺至深し最後、吾祖に至つて法ヶ佛教  
の善靈勝用は遺憾なく表現究明せられたのである  
或者は日本佛教の殆んど悉くが、其源を叡岳に發  
せざるなしと謂つて居るが、吾祖の法華經觀に比  
すれば彼猶、天地雲泥の差格なるを如何せむ。佛  
囑の遺命所弘の教法は四依の動すべからざる憲法  
であつた。

大師は支那天台上歩を進めて梵網に依る大戒の  
事担建立を見、稍事的發展をしたとは云へ、彼又  
迹面本裏一部唯迹の法華經觀であつて、吾祖の本  
面迹裏一部唯本に似るべくもない。従つて題目論  
に於ても彼亦五玄を説かぬではないが攝在屬無し  
て名玄の一重に貶し、吾祖の非文非義の破折を蒙  
つて居る。能詮の教法既に如是とせば、所詮の法  
体修行の形容に於ても高底懸隔あるまた當然であ  
らねばならぬ。彼は攝相歸性、緣理斷九、苦修練  
行の理一念三千觀であるが吾は即相顯性、當體全  
是口唱信行の事一念三千觀で有智無智を簡はざる  
唱題成佛の妙旨は實に日本佛教の完成究竟であり

又傳教滅後惠心已來の本覺法門の終窮歸結と云ふべきだ。

茲に於てか眞淨の念佛易行、天台の理觀精修何の面目がある。噫大なる哉本化の教觀、仰で信すべく伏して思ふべしだ。

(六) 結 論

聖德太子に胚胎し、傳教大師によつて教理的基礎を得た「三佛冥合」「鎮護國家」の理想は吾祖の「三

大秘法」「立正安國」の金策となり延て二陣三陣の殉教的犠牲の努力奮闘は之が具現化を物語つて居る。翻つて日本佛教の變遷過程を顧るとき、悉く是れ吾が本化一大圓教宗、結論への先序であつた根本大師の後五百歳遠活妙道と云ひ、且つ正像過稍已末法太有近の羨望と嘆聲を聞くまた宜哉である。

己上

成佛論祖判文證類集

藤 田 沼 南

祖判題名	作地	著作年次	寶算	縮遺頁數	大本遺文錄了數
戒体即身成佛義	清澄	仁治三年 (又ハ云文永三)	二十一	一〇	二十
一生成佛鈔	鎌倉	建長七年	三十四	一四 一七	十四 三十七